

マインドフルネスとは、(感情の否定ではなく)感情の中にとどまり、そばにいつつそれを吟味する能力を指す。(八)完成された愛としての阿弥陀の誓願を重視し、瞑想の技法としての念仏を提唱。(九)Brazierはこうした条件付けの克服の場を、安全なセラピー空間または Amida Trust のようなサンガでの儀礼が果たしうると考える。

医療と宗教における人間観の問題

杉岡 良彦

はじめに…本来、宗教と医療は、極めて緊密な関係にあったが、近代医学の発達以降、両者の関係は非常に疎遠になってしまったと考えられている。だが、最近の臨床的、科学的研究の動向は、宗教と医療の関係について新たな理解を要請している。本発表では、両者の関係を考える手がかりとして人間観に注目する。

エンゲルの医療モデル…内科医でもあり精神科医でもあったエンゲル Engel G. L. は当時の医学の支配的な疾患モデルである *biomedical model* (生物医学モデル) の不十分さを指摘し、これに代わる疾患モデルとして *biopsychosocial model* (人間を身体的、心理的、社会的側面からとらえようとするモデル) を提唱した。このモデルは、疾病の理解を生物的側面、心理的側面、社会的側面から考える包括的なモデルであり、これはかつての *biomedical model* と異なり、人間/患者を多元的/全人的に診るように医師を導く。しかし、宗教と医療の関係を考えようとする場合、このモデルで満足することはできない。

フランクルの人間観…フランクルの人間観はこれまで医学が明確にしてこなかった人間に固有の領域、つまり「精神」(Spirit/Geist)の領域を明らかにした点にある。その精神的な領域とは、意味を求める実存であり、人間とは、自由であり、自ら責任を引き受ける存在である。こうした精神的次元の働きを明確にしなければ、人間は生物学的次元、心理学的次元、あるいは社会学的次元へと還元されてしまう。こうした科学主義に対する批判の根底にあるのが、フランクルによる精神的次元の「再発見」なのである。また、フランクルは人間が人生から意味を問われているのだと考え、宗教的人間はその応答を「神からの委託として体験する」のだと述べる。

テイリツヒの視点——多元的統一体と中間領域——…神学者の立場から、テイリツヒも、人間の物理的、化学的、生物学的、心理的、精神的、歴史的次元を区別し、人間を「多次元的統一体」(multidimensional unity)であると理解する。さらに、宗教と健康の関係における根本問題は「中間領域」、すなわち無意識や「衝動」を含めたサイキック領域であると指摘する。それは、「オカルト的な意味においてではなく、意識の意味においてでもなく、生物学的なものとの心的なものとの間の領域、両者が参与している中間領域を指し示す」。この中間領域を明らかにすることによって、宗教のもつ癒しの効果への理解を深めてくれる。この点に関して、テイリツヒは、宗教それ自体が言葉(コンシャスに訴え、個人的な決断における人の答えを要求する)を重視する側面と、サクラメント(秘跡、礼典など)を重視する側面があることを指摘する。こうした考察は、精神と

身体との連結を見失ったデカルト的二元論とは明確に異なる立場であり、宗教的救いがサイキックな領域を介して、心身全体に影響を与えること、言い換えれば心身の癒しをもたらす根拠を与えうる。

人間観をめぐる議論の必要性・医学の基礎研究においては分子レベルから生命活動のメカニズムがますます明らかになる一方、宗教と健康に関わる研究は急激に増えつつある。本発表の意図は、生物学主義や心理学主義等の科学主義的解釈の一方で、それに代わる人間観、つまり神などの超越的存在を前提としつつも宗教と健康の関係を理解可能とする人間観を考察することにある。こうした人間観の探究は、科学的事実に対する理解を助けるだけでなく、実践面(臨床面)でも、スピリチュアルケアの重要性やチャプレン等の専門職の協力が必要であることとの理解を助けてくれるだろう。このように、人間観を中心として宗教と医療の関係を考察することにより、両者の使命と特徴があらためて明らかになり、この違いを前提とした上での協力関係が、今後さらに具体的に明らかにされる必要がある。

二重の概念図式理論から考える宗教と科学

——揺らぐ現実／虚構——

谷内 悠

創造論のなかでも創造科学やインテリジェント・デザイン論(以下、ID論)は、自らが科学であると主張し、「公立高校の生物の時間」に教えられるべきであると要求している。どちらも科学ではないとして違憲判決を受けているが、依然として公

共教育で教えられ得る科学であろうとしている。もちろん、政治や道徳といった問題もあるだろう。しかしより根本的に、なぜ創造論は「戦うべき相手であるはずの科学に基礎づけられることで自らを正当化する」ことを選んだのか、ということの本発表では問いたい。発表者はこの点こそが創造論対進化論の根底にある捻れであると考えている。

まず、現代における宗教や科学の概念とそれらの関係について精査する必要がある。そこで、宗教や科学を体系として捉え、W・V・O・クワインが提起する「概念図式」、あるいはそれと非常に類似した概念であるウイトゲンシュタインが提起する「言語ゲーム」と見なすことを提案した(以下、「概念図式」に統一)。それらの分析により、宗教と科学の最大の相違は、先行するコミットメントがあるか、それとも反証可能か、という点にあると言える。

さらに、概念図式を状況によって使い分け、コミュニケーションを担保する母体としてのメタ概念図式を措定すると、概念図式とメタ概念図式という二重構造とそれらの間にあるダイナミズムが想定できる。これが発表者の提起する「二重の概念図式理論」であり、ウイトゲンシュタイン・フィデイズムが陥っていた概念相対主義を乗り越えるひとつの方策となる。それにより、なぜ創造論は科学の基礎づけを求めのかを説明できる。

現代の先進国においては、科学の概念図式への強固な「信」が醸成され、概念図式からメタ概念図式へ向かうダイナミズムのはたらきによって「科学の概念図式に強い影響を受けたメタ